

# 長月

〔ながつき〕 令和4年9月

秋も深くなると日が暮れるのも早くなり、長時間にわたって月が見られるのでこの名があります。

発行：北海道神社庁一区教化委員会

神は正直にして明らかになり、

故に神明といふ

宮城春意・神道大意演義

## 今月のことば

神は正直にして明らかになり、

故に神明といふ

宮城春意・神道大意演義

ただ「神」といえばよいのに、何故「神」のことを「神明」というのかとの問いに対する一つの説き方をしめたものである。神の下に「明」の字のついているのは、神は明らかなるものであることを、「正直」の二字で示したものととして、「神明」というのだと説いたもので、一般に分かり易い説き方だといえよう。

尚普通、神明社、神明宮というときの「神明」は伊勢の皇大神宮を指すことになっているが、これは神のうちでも、最も徳が高く、明らかな神であるため、皇大神宮に対して「神明」の文字をあてたもので、このことは平安末期から今日に至っている。伊勢神道で「正直」の二文字を重んじ、「正直の頭に神やどる」といつて来た意味も、ここにかけられている。

宮城春意は林羅山の門下、寛文（一六六一〜一六七二）頃の人で、神儒教一致の浸透を説いた。神道大意演義はその著書の一である。

（続神道百言 一般財団法人神道文化会編より抜粋）

## 季節のまつり

### 重陽

九月九日

不老長寿を願う

「重陽の節供」

陽は「生」を意味し、陽の最大数である九が二つ重なることから「重陽」と呼ばれ、九月九日は非常に縁起のよい日とされ、この日は「登高」といつて高い山に登ったり、寿命をのばすといわれる菊の花を浮かべた酒を飲んで不老長寿を願いました。また、「おくんち」と呼ぶ秋の収穫を祝う氏神祭の日として、粟飯を炊き、菊酒を飲んで祝ったところから、菊節供・粟節供とも呼ばれています。

### 月見

九月十日

豊作を祈る収穫祭

「十五夜」

旧暦八月十五日はちょうど満月に当ります。今年は九月十日で、この日を「十五夜」、「中秋の名月」と呼び、各地でお月見の行事が行われます。豊作の象徴である満月に秋の七草（はぎ・おばな・くず・なでしこ・ききょう・おみなえし・ふじばかま）やだんご、季節の野菜などを供えて豊作を祈るお祭りです。だんごは、ちょうどこの頃収穫される里芋を炊いて供えたのが原型とされていたことから「芋名月」とも呼ばれ、すすきの穂は、稲穂の変化したものとされています。

## 「お彼岸」に感謝の祈り

彼岸は、春分・秋分の前後三日を合わせた七日間で、今年の秋の彼岸は『九月二十日〜二十六日』です。最初の日を「彼岸入り」、最後の日を「彼岸明け」、真ん中にあたる春分・秋分を「彼岸の中」（ちゅうにち）といいます。「彼岸」とは仏教用語で向こうの岸という意味で、一切の悩みを捨て去って悟りの境地に達することをいいます。この極楽浄土は西方遙か彼方にあるとされているため、太陽が真西に沈む春分・秋分にお墓参りや先祖供養を行うようになりました。

この信仰は日本独自のもので、日本古来の祖先信仰と、彼岸は「日願」でもあるため、太陽の神を信仰する神道と結びつき、秋の収穫や自然に対する感謝の祈りが、祖先に感謝する気持ちにもつながって、大切な行事となりました。「中日」に夕陽を拝むと功德があるとされています。

## 苦心惨憺

心を砕いて苦勞を重ね、困りながらも、いと工夫を凝らすこと。

彼岸花



参考文献

『くらしと祭り百話』 小野迪夫（神社新報社）  
『日本人数のしきたり』 飯倉晴武（青春出版社）

令和 4 年  
2022 年

# 9 月

日	月	火	水	木	金	土
				1 先勝 二百十日 み	2 友引 うま	3 先負 ひつじ
4 仏滅 さる	5 大安 とり	6 赤口 いぬ	7 先勝 三りんぼう る	8 友引 白露 ね	9 先負 重陽 うし	10 仏滅 十五夜 三りんぼう とら
11 大安 二百二十日 一粒万倍日 う	12 赤口 たつ	13 先勝 み	14 友引 うま	15 先負 ひつじ	16 仏滅 一粒万倍日 さる	17 大安 とり
18 赤口 いぬ	19 先勝 敬老の日 る	20 友引 彼岸入り ね	21 先負 うし	22 仏滅 社日 三りんぼう とら	23 大安 秋分の日 秋分 一粒万倍日 う	24 赤口 たつ
25 先勝 み	26 先負 彼岸明け うま	27 仏滅 ひつじ	28 大安 一粒万倍日 さる	29 赤口 とり	30 先勝 いぬ	

## 二十四節気

【白露 はくろ】… 八日

旧暦八月酉の月の正節で、秋分前の十五日目にあたります。白露は「へしらつゆ」の意で、秋気も本格的に加わり、野草に宿るしらつゆが秋のおもひききとほお感じさせます。

【秋分 しゅうぶん】… 二十三日

旧暦八月酉の月の中気で、この日は秋の彼岸の中日で国民の祝日にも定められ、祖先をうやまい、亡くなった人の霊をしのぶ日にあてられています。またこの日は春分と同じく、昼と夜の長さがほぼ等しく、この日を境にして徐々に昼が短く、夜が長くなっていきます。

## 六曜・選日

〔六曜〕

〔先勝〕… 諸事急ぐことによし、午後よりわるし

〔友引〕… 朝夕よし、正午わるし、葬式を忌む

〔先負〕… 諸事静かなることによし、午後大吉

〔仏滅〕… 万事凶、患えば長びくおそれあり

〔大安〕… 何事をするのにも吉日、大吉日

〔赤口〕… 諸事油断すべからず、正午のみ吉

〔選日の吉凶〕

〔三りんぼう〕… 三隣亡日、普請始め、棟上大吉日

〔一粒万倍日〕… 出資・投資・購入、新規事業開始

… 婚姻は吉、借りる、離別は凶

## 七十二候《9月》

### 秋分

初候・雪乃収声（なみなりすなわらこえおとせぬ）  
次候・蟬虫坏戸（おしかくれてこをひんぐ）  
末候・水始涸（みずはじめてかる）  
田の水を落して稲穂の刈り入れを始める

### 白露

初候・草露白（くさのつゆしろく）  
次候・鶉鳴鳴（せきれいななく）  
末候・玄鳥去（つばめおのる）  
ツバメが南の地域へと帰っていく

※七十二候とは二十四節気の各節気をさらに3つの候に細分し、一年を七十二に分けたものをいいます。季節の移ろいを気象や動植物の成長・行動などに託して表現したものです。

## 「春社と秋社」社日とは？

社日（しゃにち・しゃじつ）とは、

春分・秋分に最も近い戌（つちのえ）の日で、土地の神様をまつる日です。春の社日を春社、秋の社日を秋社と呼び、春社には五穀の種子をまつって、その豊熟を祈り、秋社には初穂を供えてその成熟を祝う行事が行われます。

農耕民族である日本では、各地でその地域によって違いはあるものの、土地の神様を信仰する風習は全国各地で根付いており、重要な農耕儀礼として現在でも様々な神事や行事が行われています。

又、この日は「土の神」をまつることで、農作業を忌むという風習があります。農作業の手を休めて産土神に参拝し、五穀豊穣を祈り大地の恵みに感謝をします。農家にとっては暦の上でも重要な節目の日となっています。

## 安産祈願 9月の戌の日

6日（火）・18日（日）  
30日（金）

\*戌の日以外でも安産祈願のご奉仕をしております。神社にお問い合わせください。

### 《19日 敬老の日》

多年にわたり社会に尽くしてきた老人を敬愛し、長寿を祝う日です。

### 《23日 秋分の日》

祖先をうやまい、なくなった人々をしのぶ日です。

● 祝祭日には国旗を掲げましょう